

## 生活のなかの看護

私をはじめ看護について考えるようになったのは、自宅で母を看取ったときからです。乳がんの再発が判明し、五カ月間の抗がん剤治療ののち、最期を自宅で過ごすことになりました。抗がん剤治療のころは、脱毛や強い吐き気に襲われたり、肺炎を引き起こして激しい咳に苦しんだりしながらも、母は「治療のためだから…」と弱音をはきませんでした。そんな姿に私は励ましや心配をすることしかできませんでした。しかし、抗がん剤治療をやめると決意した日に母が「毎日のように病院に行って1日かけて検査を受けたり、結果を待ったりするのにもう疲れちゃった」とつぶやき、その時になってはじめて、母一人きりで病気と闘わせていたのではないかと気づきました。母の病気を認めたくない気持ちが強く、母が今実際に感じている痛みや苦しみ、不安を直視できていなかったのです。

自宅で過ごすことを決めたあとすぐに訪問看護師さんが援助に来てくれました。「無理や我慢はしないで、自分らしく穏やかに生活することが大切だ」と繰り返し、今までと同じような生活が送れるように調整し支えてくれました。点滴の処置などもわかりやすく指導してもらえて、家族全員で母を看護できるようになりました。私が点滴を抜き皮膚の消毒をしている間に、父が新しい点滴とポンプの準備をし、それを母が笑いながら見ているという光景を懐かしく思い出します。今振り返ると、これは病院での治療や処置とは違う生活の一部のように自然な看護であったのではないかと感じます。

自宅での生活を送ることで、病気が中心でなく、母を中心に家族全員で支え合うことができたと思います。訪問看護師さんは母が母らしくいられるようにあたたかく励まし支えてくれました。そして最期が近づいてきて不安や戸惑いが大きくなっていく私たちに家族を確かな知識とすばやい判断力で導いてくださいました。病院で看取るべきなのかと迷ったときには「皆さんなら自宅で最期を看取ることが十分にできると思います」という言葉に勇気づけられました。いま私が「母を看取れてよかった」「きっと母も穏やかな気持ちだっただろう」と思えるのは看護師の方々の支えがあったからです。自宅で穏やかな時間を一緒に過ごし、少しでも母が孤独や不安を感じずにいられたなら、よい看護ができたのではないかと思います。そして、看取りを行うわたしたち家族も訪問看護師さんに支えられ看護してもらっていたからこそ、良い看取りができたのだらうと、看護を学び始めてから実感するようになりました。

看護学校に入学し学習を重ねて実習も経験してから、ますますお世話になった看護師の方の判断力、適切でわかりやすい説明や状況に応じた臨機応変な対応力に圧倒されるようになりました。そしてQOLを高める支援の難しさや責任の重さを痛感しています。